

# 院外茶話

vol.61 平成 22 年 6 月 1 日

傘寿を迎えると  
静かになるものだけど  
元気な年寄り  
医者をかからかう

## 傘寿Vs還暦

還暦を過ぎて、爽快な目覚めはめったにこない。数日、腹痛と不眠が続いて病院を訪れたおり、診察をしてくれたのは、多分 30 代の医師だった。軽い胃炎でたいしたことはない。ただ、酒を少し控えて体重を減らすとよいと、教えてくれた。

ここまではよかったが不眠に関しては、もう 60 歳を過ぎたのだから少し落ち着けとか、ものごとを深刻に考えるなどか言われると、余計なお世話じゃい！

でも、もし立場が逆さまだったらどうなるか。私は普段、20 歳も年の上の方に対して、何を言っているのだろう。

マルコム・カウリーという口やかましいアメリカ人の文芸評論家が出て、この人も多分同じ思いでムカついたのでと思う。年寄りのことは、年寄りしかわからないという発想で、自身が 80 歳になってから、80 歳の気持ちを綴った本がある。

タイトルは「八十路から眺めれば」。



この著書の中で、マルコムは老いの研究をする 60 歳前後の学者のことを、「人生を知らない子供たち」と呼んで、一笑に付してしまいます。こんなことを言われると、さんざん老いと病気について記してきた「院外茶話」はどうなってしまうのでしょうか。

マルコムによれば、「本当の老いの世界は思いもよらない新たな経験に満ちている。老いるにつれて世界は違った姿で見えてくる。」

将来に向けて、肝に銘じておかななくては。

ただし同じ 60 歳の「子供たち」をおちよくるにしても、マルコムみたいな人ばかりではなく、愉快的高齢者も多い。

でも、この方達はどうも自分の死を冗談のネタにするので、やりにくいのだが。

A 婦人の場合：点眼薬をいろいろ変えて、ようやくいいものがみつかったときのことです。

私「緑内障も安定してよい状態だと思います。このままの点眼を続けて、2 か月後にいらして下さい。」

A 婦人「2 か月ね。フフッ、生きていたらね。」

B 婦人の場合：3 か月毎にきちんと来院をしていた B さんですが、この度はだいぶ間隔があいてしまいました。

私「しばらくでしたね。目薬はありましたか。」

B 婦人「薬はあったんですけどね。先生、私が死んだと思っていたでしょう。」

私「そんなことはありません。」

C 婦人の場合：婦人はお嫁さんとうまくいっていない様子です。

C 婦人「先生。今度私引っ越すことになりました。もうここには診察にこられないかもしれません。」

私「ほう、では紹介状を書きましょう。どちらに引っ越されますか？」

C 婦人「あの世！」

その他、日本とオーストラリアを行ったり来たりして暮らす90代の男性は120まで生きる人生設計をして、円高を喜んでいた。6時を過ぎて「本日の受付は終了しました」という札を下げると、これを裏返して入ってくる人もいる。

多少からかわれてもいいから、マルコム・カウリーの診察をするよりは、よほど楽しいかもしれない。

## 空の上の 入院日記(3)

11月の末、紫斑病が再発をして治療は一から出直し。もう一度輸血をして、ステロイド剤を使った長期戦の始まりです。昨今、話題のピロリの除菌も始めて薬の量がものすごい。

唯一よかったのは、これまで何回も挑戦してできなかった禁煙が、いとも簡単にできたこと。禁酒までする予定はなかったのだけど、これもやってしまった。



病棟からの眺め。手前から芝公園、東京プリンスホテル、そして増上寺です

1カ月近くを要したけれど、少しずつ血小板も増えて、クリスマスイブの日には5万を越えました。正常値の数分の1とは言え、ひとまず危険な領域から脱出をすることができた。

そして年末から年始にかけて、一時帰宅も許されたけど、酒もお節も控えて、正月と言えたものではない。

「門松は 冥途の旅の 一里塚」

一休和尚が歌った狂歌で、物悲しい新春の祝いが見えてくる。

「めでたくもあり、めでたくもなし」

それでも、病室で過ごすよりはよほどよかったかな？

外出もできない年末年始なので、我が家でしたことと言えば、万が一に備えて身辺整理でした。

昔の彼女の写真とか、手紙の類は残っていないか。自分自身の写真など数枚あればいいだろう。一通り思い出の品々の整理をして、気づいたことだけど、卒業証書をじっくり見たのは初めてだった。

小学校の通信簿も出てきて、5段階の評価はまあまあだったけど、「行動の特徴」という連絡事項に衝撃的なことが記されていた。

「気が向くとよく作業をするが、気分にもむらがある。ちょっと注意をされると、どこ吹く風で聞こえないふりをする」

それを横で見ていた娘が

「今と全然変わらないじゃない！」

この先生とは今でも親交があって、50年も昔の話を聞かされる。当時は新米教師だった先生が読んだ私の作文とは

「人生は空しい。何のために生きているのかわからない」

若手の先生にとって、こんなことを書く子供は想像もつかなくて、私は問題児だったのであります。しかし、これには続きがあって、何年か経って気付いたそうです。

「考えて見れば、あなたは少しませているだけなのよね」

その、ませた子供は小説や詩も書いていて、これも全て処分。でも、あまりに懐かしい文章だったので、恥ずかしい思いに耐えながら、一通り目を通してからゴミ箱行きとなりました。

まあ、生まれてこのかた、間違いなく最悪の正月でした。



入院中はリハビリと称して芝公園の散歩。11月というのに、季節はずれの桜を発見。